授業実践の解釈に関する一考察

―定着型授業に対する批判的検討―

＜上島ゼミ＞　　黒田　玲央
(416061)

キーワード：生成型授業、教材観、授業づくり

【研究の背景】

3週間Ｈ中学校で教育実習へ行った。体育分野の授業内容はネット型スポーツのバレーボールだった。バレーボールにほぼ触れ合ったことのない1学年だったため、パスの技術の向上に多くの時間を費やした。授業を重ねるうちに、パスの技術がゲームの成立するまでに上達したと感じられたので、想定されるゲームに合ったルールを４つ設定し、規定のコートとゲームサポーターを設置してゲームを行ってみた。

しかし、想定していた姿とかけ離れたゲーム内容になってしまった。よりよいゲームを生徒に行えるように設定したルールなどが欠点となり教師の考えと生徒の学びの姿に大きなズレが生じてしまった。

なぜこんなにも差が生まれたのか反省をするなかで、多くの疑問が浮かんだ。その疑問を「技」の習得が主軸となってしまいがちな定着型授業を批判的に検討し、生徒から自然発生的に学びを生み出す生成型授業を肯定していきたい。

【研究方法】

第一章では、知識や技能、内容の習得の変化を見つめる。

第二章では、研究授業で行われた内容をもとに授業の実際を振り返る。

第三章では、想定した学びの姿と実際の学びがずれてしまった要因を掘り下げる。

第四章では明らかになったことをもとに教材を再考察する。

【第一章】資質・能力をめぐる動向

学校教育が子どもにトータルで育成すべき「資質・能力」を明確化し、それを基礎にカリキュラムを編成し授業を生み出そうとの動きが、近年、世界的に活状を呈している。それは、教育に関する主要な問いを「何を知っているのか」から「何ができるのか」、より詳しくいえば、「どのような問題解決を現に成し遂げるのか」へと転換させる。

そして、学校教育の守備範囲を知識・技能に留めることなく、それらをはじめて出合う問題場面で効果的に活用する思考力・判断力・表現力など、汎用性のある認知スキルにまで高め、さらに粘り強く問題解決に取り組む意志力や感情の自己調整能力、直面する対人関係的困難を乗り越える社会スキルの育成にまで拡充すること、すなわち学力論の大幅な拡張と刷新を否応なしに求める。あるいは、知識・技能についても、個別的で要素的なものから概念的な理解やより統合された知識へと、その質を高めようとの動きが顕著である。

【第二章】授業エピソード

ゲームを行うにあたり①1バウンドあり、②1人2回連続触ってはいけない、③2回以上で返球、④サーブはアタックライン付近から優しく下投げで相手コートに送る、以上の4つを最低限のルールとして設定した。ゲームは前半戦3分→チーム内反省→後半戦3分でおこなった。

前半戦を終え、チーム内反省の対話の中で想定していた生徒の意見は「相手コートの空間を攻めるためには視野をもっと広げて、動くことが大切である」だった。しかし、実際に生徒か

ら生まれた意見のほとんどは「ボールに向かわず突っ立ってしまった」「声が出せていないからだれが何をしたいのかわからない」であった。ゲーム中に沈黙が生まれることが多く、ゲームサポーターなどから声援が送り、ガッツポーズをする生徒が生まれると考えていたがそのような姿はほとんどなく、想定していた姿に再起動するべく筆者が生徒に声をかけた言葉は「声を出してゲームを盛り上げて！」「声を出してボールを呼んで」だった。

【第三章】生徒の学びの可能性

生徒の学びは教師の予想ができないほど急激に現れる。しかし、教師は学習指導案通りに授業を進行しないといけない。そのため、スモールステップを踏みながらの授業進行になる。このように授業を進行すると、急激に現れる生徒の学びが生まれる生徒と生まれない生徒の二極化現象が起きてしまう。しかし、この状況があるにもかかわらず指導計画があるため、生徒の学びが疎かであっても進行してしまうのが現状だ。学びが生まれず停滞してしまっている生徒がいるこのような背景から「落ちこぼれ」が発生してしまう。

生徒は今までわからなかったことが分かるようになったときに学びが生まれる。「あっ！」という不思議なひらめきを感じる体験から生徒は成長する。しかし、この成長は感覚的な学びであり、この学びを人に伝えるにはまだ不確かなものである。そのため、他人と関わり合う中で、自分と何が違ってできていないのか、できているのかを観察する視点ができる。そこで、助言や話し合いのなかで「あっ！」と発見したことが一つの学びとして成立する。つまり、発展の中に必ず基礎があり、発展を行うためには基礎が必要である。これを生徒から生み出すためには、発展をはじめにおこなうことが学びの本質を生み出す第一歩になるのではないか。

【第四章】教材の再考察

今回の球技ネット型スポーツ（バレーボール）を通じて、これまではバレーボールという競技を行うためにパス技術の向上などの「技」の獲得のために取り組んできた。しかし、応用のなかに基礎が存在し、その基礎は自然に生徒から引き出せるものであった。これまでは、到達したい器に教師が技術と知識を流し込むだけで、生徒から学びが少なくなっていた。そのため、これからの学びは個人の出来栄えを評価する「目標―達成―評価」ではなく、何をどのように学んだかの「主題―探求―表現」を重視することが、生徒の学びを「定着型」から「生成型」に変化すると考える。

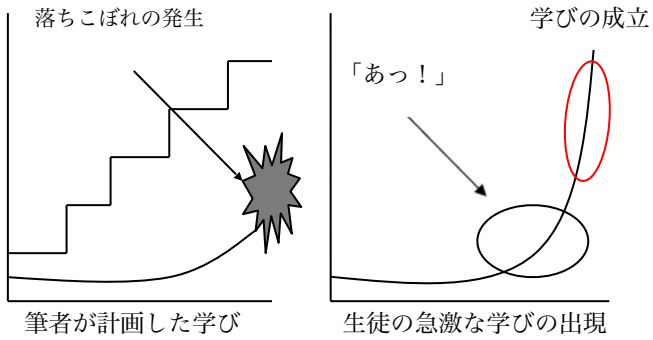

図１　生徒の意図の学びの現れ方の模式図

【まとめ】

本研究で明らかになったことは、個人の出来栄えを評価してしまっている定着型授業「目標―達成―評価」は「技」の獲得が主軸になっていた。この定着型授業では到達させたい教師の計画と生徒の到達度にはズレが生じてしまう。そのため、生徒が自ら進んで取り組むための学びの姿勢である生成型授業「主題―探求―表現」に移行することが、生徒の学びの可能性をより引き出すもとになると考える。

【引用文献・参考資料】

1)奈須正裕(2017):「資質・能力」と学びのメカニズム、東洋館出版社
2)文部科学省（2008）：中学校学習指導要領保健体育編、東山書房
3)研究授業を撮影したビデオ2017.6.15
(巡回指導員の撮影によるもの)